

(ページよりのつぎ)
たるものを賞えるのである。

しかしながら、標題にかかげた、この「徐文長文集」について、その内容を解説したり紹介する、力まなれぬその余裕もなく、またこうして執筆する本旨でない。

この本は、今から三十年程の前の昭和十九年の春、明石家から北大(当時九州帝国大学)に寄贈されたものである。このような程度の高い図書は、なまじ佐伯に死蔵するより、北大の図書館にある方がおしス所を得ていて、中国文学研究に大いに役立てることが出来る。明石家の当時の寄贈措置は、まことによいことであつた。

この「文集」の中の二、三の詩文に、まるではじめから印刷されたように、きれいに訓点が施されている。恐らく秋室が書き入れたものであろう。なつかしみながらそれに従つて読んで見たが、内容はたやすくわかるものではない。恐らく他のすべては、白文のまま読んでいたのであろう。

それから、四冊そろえて置いてみて驚いた。本の手前小口に夥しい竹箋の跡がある。和紙の小片をきれいに切つたものであるが、もうよじれて半ばは切れている。秋室自身がいつも座右に置いていて、必要を個所を求めてはペトジをめぐつていた証跡である。昔の人は、体裁で本を硝子戸棚に並べる今の入達とちがひ、日夜愛用のために本を身近に置いていたのである。

徐文長の時代は、明朝も末に近く、我が国では永祿から天正にかけての戦国時代、争乱に明け暮れていた頃であつた。唐・宋の文学華やかな時とちがひ、明朝も終りに近いころの徐文長の詩文を、さらに二百数十年後の明石秋室が学んだという。まことに文学は時の流れに超越、廻の隔たりに問題はなく、秋室のお蔭で今私どもは

このように学ぶことが出来る。

上尾北大助教様からば、別掲のように佐伯史談会様多額のご寄付まで頂いている。このように物心両面から、はるかにはなれた佐伯の私どもを顧みて下さつたこと、心から感謝するものである。(おわり)

探訪記

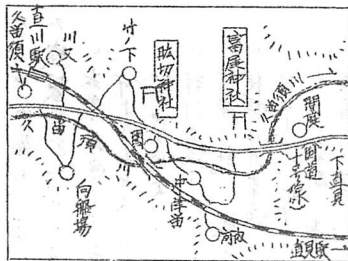
上直見・富尾神社の秋祭り
— 豊稔感謝の神賑おいを見て —

九月十四日午後、直川村上直見に鎮座する、富尾神社の秋祭りがあつた。杖踊りなどの奉納がある。見に来た人はいか——と休石会員からの連絡があり、また地区の代表の方からもご案内状が届いた。そこで当日、高木会長と清田氏、それに私と三人で出かけた。

この上直見地区は、秋切神社(ス留宿・川下・向船場・園の氏神)と富尾神社(中津宿・河原・問渡の氏神)の両社があり、集落はあちこちと散らばっているが、昔から人々の気風も生業も共通し、神社の祭りについても時期も前後し、ことに奉納する杖踊りの類も殆んど同じである。獅子舞も杖踊りなどさびれる一方であつた。

このことをなげいた両社の氏子総代の方々が話合ひ、幸い神賑ちの行事が共通してゐるところから、打つてつらなり一年交代で杖踊りなどを両社に奉納しようということになり、昨年から発足してまず肝切社で行ない、今年が富尾神社の番だといふ。

ちよんと村の文化財、民俗芸能としていつまでも保存しようといふことで、かちりした杖踊りの保存会も出来てゐるといふから、たいしたものである。会長は火畑二喜氏である。



さて、私た古は中津留に行つた。見ると青山墨沢の富
臣神社の杖踊り保存会の方々、多田会長以下八人の方々
と一しよになつた。熱心なことである。

参拝の行列は猿甲考を先頭に大幡・小幡がつつき、杖・
鐘・笛・太鼓・獅子・踊子、それから一般参拝者と散列
ととのえ、後りゆたかな田圃道を、踊りながら練りな
から、圃道に出て参道の高い石段を登つた。

言うまでもなく富辰神社の祭神は、悲運の梅牟礼城主佐伯惟治であ
る。その悲劇も、怨霊神のことも今はもうとんじやくなく、村の鎮守と
して仰ぎ、五穀豊熟をねがい、今この出穂の美しい秋の、今日は
感謝の作祭りである。天地の恵みもすべて神徳によるものとし、その
祭礼神事は、当社担当の緒方官司によって執行され、氏子総代が
参列して、今すまじとどろ、一回社前口並んで修祓(おぼらい)と
うけ、おとし神へ合一の法楽、神賑あいの行事奉納である。そしてそ
れは、次のように行なわれた。

- (一) 奉納杖 (間度・園・竹ノ下)
- (二) 神踊 波打つ (全 少女連中)
- (三) 杖 (間度・園)
- (四) 獅子舞 (河内)
- (五) 杖 (園・竹ノ下)
- (六) 神踊 小所おどり (全 少女連中)
- (七) 杖 (園・間度)
- (八) 獅子舞 (向船場)

右終り引きつつき、

奉納相撲 小澤枝院童(入浴前の豆カサも含む)

拜殿では参列者へ戸高村長以下有志、われらも黙ぼう(うま)
一同御神酒を頂くべく、直会(なからい)の座につく。口々
に今日の祭礼の賑あいをほめたたえ、この催しについて
関係者の苦勞をねぎらい、隔意のない意見交換など出る。
土儀からはめんやの喝采の声があがり、神と人と一つに

なつての賑あいは盛りあがる。その席での話め、見た私
の感想など、とりまとめて書いて見よう。

○ 去年再興して今年が二年目、それにしては女がなかの出来。
何よりお老へ、昨年、青年、男女の子供、それに一般の人々総参
加が盛がよい。

○ 行列を組んでの参拝がよい。神幸祭でなけれど、この形がよい。
拜殿の前で、儀から修祓(おぼらい)をうける。おつたのよよい。
○ 杖踊りの奉納、三軒落とも勇壯活潑、練習も出来ていた。二年
目にしてこれまで出来左の立派、長共達も指導者の甲斐があつ
たといえる。奉仕者と下にひらけて中学生と知るよよい。

○ 杖踊り、初めの言ひ立ては陳腐すよが逆らぬ、奏者の声に張り
がない。赤手からは、今更ら「天竺云々」の言葉と察して、おろし神
徳のおかげで豊稔の恵み——と讚美、感謝するほめ言葉にかえる
とよい。

○ 少女連の神踊りは、あの素朴さがよい。しかしもつと廣々と庭(ばい)
でやつてもらいよい。

○ 獅子舞いはよかつた。二組ともお上手。おれは途中交替で二人
だけで出来ないか。交代のさまが興をそごとおひたらしい。中休
みと二、三分とって獅子はうすくまて休息出来ないか。

○ 総じて服装、装束、装枝(杖、獅子、まわしなど)よく準備されてい
て、世話する人々は大変だと思つた。

○ 脇切社にしては大体同じであらうが、おれほどの奉納神賑あい、おれ
ほどの観衆があるからには、境内をよつと広く出来ないものか。

○ 最後の老へのたわごとながら物売りの店が、二軒ともよい。ゴム
風船、肉桂水、竹筒、栗おこし、きんぼう。当り節露店商人が
来ないなら、女子青年も婦人会が奉仕してお店を出して、幼児
たちにも楽しいお祭りを味あつて貰いたい。

作祭り——それは、まことになつかしい村の祭礼であ
る。農村直川にこんな貴重な民俗行事を、昔の伝統をた
やすまいと、心ある人々によつて維持されている。この
祭礼形態は、まず村の段階で保護し、村の無形文化財と
して、いついつまで保存してほらいたいと思いつつ、
私共は帰りのバスに急いだ。 —(明柴)—